

# 寛永海部大分大野三郡図に記された上関村

松崎 伸一(四国電力株式会社), 平井 義人(大分県立芸術緑丘高等学校)

## §1. はじめに

慶長豊後地震(1596年)の津波被害を記述した史料として『玄与日記』が知られている。そこには、「去七月十二日之地震之時。かみの関と申浦里は。大波にひかれて家かまともなし。」と記されている。この「かみの関」がどこを指すかについては、周防国上関とする見解、佐賀関上浦(別府湾側の集落)とする見解などがある。今回、この解釈に関係する新しい史料を発見したので、ここに報告する。

## §2. 新史料

新たな史料は、『寛永海部大分大野三郡図』(白杵図書館蔵)である。この絵図には、佐賀関上浦に「上関村」、白杵湾側の佐賀関下浦に「佐賀関村」という文字を確認できる。この絵図は村形に丸輪型を採用するなど、慶長国絵図の様式を踏襲しており、白杵藩が作成した国絵図関連の史料と考えられている。そして白杵市教育委員会(2005)は記載されている藩主名から1615~1626年の作成と推定している。これより慶長豊後地震の20~30年後に佐賀関上浦に「上関村」が存在したことが明らかとなった。

## §3. 関連史料の整理

古くから海上交通の要衝として栄えた佐賀関は、近世においては大友水軍の重要拠点であり、大友義統は1588年に佐賀関法度を発給し、「関両浦町立之事」として両浦に町の設立を命じている。

同年の大友家文書録には、「豊後国より御材木登候者、如毎々木おもさ積糧米、算用次第可計渡候、上関より尼崎迄八百里之海上候、上関下へ之儀者、彼奉行衆墨付次第算用可仕候、何も百石目のおもさに付、十里六斗宛可相渡候、能々念を入可申候、恐々謹言」という記述があり、上関という地名を確認できる。この文書は、秀吉の命を受けた寺沢広政が、豊後国から尼崎へ材木を運ぶ船賃を通達した文書であり、海上で百里という距離は佐賀関から尼崎までの距離とほぼ整合することからも、この上関は佐賀関上浦を意味する可能性がある。また『参宮帳写』によれば1590年に佐賀関衆3人(下関の喜右衛門・宮太郎・宮松)が伊勢に参詣した旨の記述があり、下関の存在を確認できる。そして前述の三郡図は「上関」が公的に使われていたことを示すものであり、これら3史料により、16世紀末の佐賀関に上関・下関という地名が存在したことが立証される。

それ以降は、『豊後国古城蹟并海陸路程』(1646)、『両豊海上行囊抄』(1696)、『天保国絵図』(1835-1838)など、多くの史料で上関・下関という表記を確認できる。

以上より、慶長豊後地震が発生する前の佐賀関に上関・下関という地名が存在したことは確実であり、17世紀から19世紀にかけては一般的に用いられていたと整理できる。

## §4. 周防国上関と考えた場合のいくつかの疑問点

玄与は上洛の旅程において周防国上関には寄港していない。『豊府聞書』によれば沖浜及び府中の死者は708人にも上ったにも関わらず、こうした近隣の大被害ではなく、遠方の周防国上関の出来事について記述するのはそもそも不自然ではないだろうか。

次いで、国東半島にある興導寺の大般若経奥書には国東における津波被害の様子は書かれていない。周防国上関に被害が生じるような広域津波災害であったのであれば、国東にも津波被害が生じたはずであり、奥書に記述があってもいいのではなかろうか。

3つめは、豊後国においては慶長豊後地震津波の被害

を記述した古文書が複数存在するが、周防国にないのはなぜであろう。

さらに、地震直後の周防国上関の様子について書かれた史料『日本往還日記』である。文禄の役の講和交渉のために来朝した朝鮮通信使は慶長豊後地震の約1か月後に周防国上関に寄港し、上関は下関(長門国)同様大変繁盛していて館舎も広くて立派である旨を書き遺している。津波被害を感じさせる記述はない。「かみの関」が周防国上関であったとするならば、『日本往還日記』の記述には違和感がある。

最後に、津波痕跡調査結果との整合性である。愛媛県は2012年度に津波痕跡調査を実施している。そのうち、ボーリング等により津波堆積物を調査した結果において、瀬戸内側地点で津波堆積物が確認されたとの報告はない。豊後地震の津波被害が広域にわたるものであったとするならば、伊予灘沿岸で津波の痕跡・堆積物が確認されることがあってもよいと考えるが、そのような報告はない。

これらの疑問については、「かみの関」を佐賀関上浦と解釈すれば、一番矛盾なく説明できると考える。

## §5. 津波浸水深からの考察

2013年2月に大分県が公表した津波浸水予測調査結果(津波シミュレーション)では、慶長豊後型地震における佐賀関の最大浸水深は、上浦で4m未満、下浦で3m未満とされており上浦の方が高い。浸水域も、上浦の方が広く、下浦の浸水域は海際の極狭い範囲に限られている。下浦は古来より港湾の大規模な埋め立てがなされていないのに対し、上浦は早吸日女神社の船着き場があることから、比較的早い時期から埋め立てが行われ、標高の低いところに集落が発達していたのではないかと考えられる。そして、慶長豊後地震の津波の高さは、上浦側が高く、下浦では上浦よりも低かったと考えられることから、慶長豊後地震津波における被害は、上浦で大きく、下浦では小さく、上浦の標高の低い集落で家が流されるような被害が生じたのではないかと考える。

## §6. まとめ

以上から総合的に評価すると、『玄与日記』が記す「かみの関」は、佐賀関上浦を指すと考えるのが合理的である。そして、玄与は慶長豊後地震の約20日後に、大きな津波被害は受けなかった佐賀関下浦に寄港し、そこで上関という集落(今の佐賀関上浦)における大きな津波被害の話聞き(あるいは実際に見て)、日記に書き留めたのではないかと推察する。



「佐賀関村 加藤肥後守」 「上関村 加藤肥後守」  
『寛永海部大分大野三郡図』